

複数言語環境における「移動」と Child Agency に関する一考察

— 日中国際結婚家庭を事例に —

小幡佳菜絵（清華大学大学院）

本研究では、在北京日中国際結婚家庭の日本人母親 2 名による、複数言語環境における育児に関するライフヒストリーを手がかりに、日中国際結婚家庭で成長する子どもが、多様な「移動」を契機として、どのように複数言語使用・学習における行為者性（以下、Child Agency）を発露させたかを、探索的に検討することを目的とする。Child Agency は、とりわけ家庭内言語政策・方針（Family Language Policy; 以下 FLP）の領域で、近年活発に議論されている主題のひとつである（Fogle & King, 2013; Gafaranga, 2010; Revis, 2019; Tuominen, 1999）。2000 年代以降、学際的な研究分野として発展してきた FLP 研究の文脈では、複数言語環境を特徴とする家庭の言語選択・言語実践について、当初、主に親を主題とする視点から検討されてきた。とりわけ、先行研究においては、言語やバイリンガル教育に関する親のイデオロギー（Parental Language Ideology）が、子どもの言語運用能力等のアウトカムにどのように関連しているのか、という両者の関係性に焦点をあてた研究が多く観察される（Curdt-Christiansen, 2009; De Houwer, 1999; King *et al.*, 2008）。このような研究状況に対し、FLP 構築過程に主たる影響力を行使するのは、必ずしも親を含む保護者だけではないという問題意識から、かれらの言語イデオロギーや言語実践；FLP 構築における、子どもの行為の影響力・役割に積極的な意義をより見出す、Child Agency の重要性が近年より強調されるようになってきた。

先行研究をみると、これまでのところ、「移動」と Child Agency の関係性については、概ね他国へ移住する「国際移動」の文脈で語られることが多いように思われる（Gafaranga, 2010; Revis, 2019; Tuominen, 1999）。そこで、本研究では、より多角的に「移動」と Child Agency の関係性について検討するため、上記の研究傾向を念頭におきつつ、次の二点の研究課題（以下、RQ）を立てた。（RQ-1）国際移動に加え、中国国内における国内移動；進学という子どもにとっての社会的空間移動という、計 3 種類の「移動」形態を包括的に射程としたとき、「移動」によって、主に家庭内の複数言語使用・学習における Child Agency は、どのような発露のありかたを示すのか。（RQ-2）先行研究において、これまで複数の Child Agency のありかたが議論されてきたが（例：継承語に替えてマジョリティ言語を使用することに対する、子どものリクエスト）、日中国際結婚家庭の文脈では、「移動」に際する Child Agency のどのようなありかたが観察されるのか。

これら二点の RQ に回答するため、本研究では、基本的に北京に現在の生活拠点を置く一方、これまでカナダへの一家での国際移動を経験した A さん（仮名）と、広東省から北京への国内移動を経験した B さん（仮名）という、2 名の日中国際結婚家庭の日本人女性を対象に、ライフヒストリーを中心とした半構造化インタビューを実施した。インタビュー・データを Open Coding（Corbin & Strauss, 2015）により分析した結果、15 年以上にわたる、中国を中心とした複数言語環境での育児における、「移動」と子どもの Child Agency のありようについて、次の二点の結果が得られた。（RQ-1）総じて、3 種類の「移動」形態に共通して、「移動」後に新たに構築された友人関係からの《自身のルーツである民族性・文化への肯定的評価》が、日本語や広東語など、子ども自身の言語レパートリーへの再評価や、これらの言語レパートリーへの学習動機につながる傾向が観察された。ただし、このような友人関係の変化による民族性・文化に関する評価は、非肯定的なかたちで子どもたちに与えられるこ

ともあり、その両義性については留意する必要がある。(RQ-2) このように、友人という具体的他者からの肯定的評価を源泉とする、自身の言語レパトリーの再評価の結果、とりわけ A さんの家庭では、母親が話す日本語を、中国語母語話者の父親に向けて翻訳するという《家庭内通訳》を担う Child Agency のありようが、先行研究と比較したときの独自性として観察された。総じて、本研究は、母親の視点から観察された Child Agency である、という点に限界がある。母親のライフヒストリーという長期的視座だからこそ、観察されうる Child Agency のありようも認められる一方、今後は、子ども当事者の視点も含め、より多角的に本研究の主題について、さらなる検討を続けたい。

参考文献

- Corbin, J., & Strauss, A. (2015). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (4th ed.). SAGE Publications.
- Curdt-Christiansen, X. L. (2009). Invisible and visible language planning: Ideological factors in the family language policy of Chinese immigrant families in Quebec. *Language Policy*, 8, 351-375. <https://doi.org/10.1007/s10993-009-9146-7>
- De Houwer, A. (1999). Environmental factors in early bilingual development: The role of parental beliefs and attitudes. In G. Extra & L. Verhoeven (Eds.), *Bilingualism and Migration* (pp. 75-96). De Gruyter Mouton. <https://doi.org/10.1515/9783110807820.75>
- Fogle, L. W., & King, K. A. (2013). Child agency and language policy in transnational families. *Issues in Applied Linguistics*, 19, 1-25. <https://doi.org/10.5070/L4190005288>
- Gafaranga, J. (2010). Medium request: Talking language shift into being. *Language in Society*, 39(2), 241-270. <https://doi.org/10.1017/S0047404510000047>
- King, K. A., Fogle, L., & Logan-Terry, A. (2008). Family language policy. *Language and Linguistics Compass*, 2(5), 907-922. <https://doi.org/10.1111/j.1749-818X.2008.00076.x>
- Revis, M. (2019). A Bourdieusian perspective on child agency in family language policy. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 22(2), 177-191. <https://doi.org/10.1080/13670050.2016.1239691>
- Tuominen, A. (1999). Who decides the home language? A look at multilingual families. *International Journal of the Sociology of Language*, 140, 59-76. <https://doi.org/10.1515/ijsl.1999.140.59>